

# 『建御雷神(タケミカツチ)は大歳尊だった』

たかみやしんじ

NHK教育テレビジョンの番組に「サイエンスZERO」というものがある。平成15年(2003年)に始まった科学教育番組である。NHKによれば、“私たちの未来を変えるかもしれない最先端の科学と技術を紹介すると共に、世の中の気になる出来事に科学と技術の視点で切り込む番組”と謳う。

平成30年(2018年)12月23日には、「弥生人DNAで迫る日本人の起源」というテーマで放映された。番組では、青谷上寺地遺跡(鳥取県鳥取市)から発掘された人骨群を、最新のDNA分析した結果が紹介された。それによると、従来縄文人と弥生人の遺伝子は半々くらいとされていたものが覆され、大半が弥生人の遺伝子であることが判明したというのだ。青谷上寺地遺跡は、弥生時代前期後半(紀元前2世紀頃)に集落として姿を現した後発展し、古墳時代前期初頭(紀元3世紀頃)に突如として姿を消したとされている。

これらのことから想起されるのは、「古事記」に著される少彦名命である。「古事記」の記述では少彦名命はオオクニヌシの国土造成に際し、天乃羅摩船に乗って波間より来訪し国造りに協力した後、忽然と常世の国に行ってしまうのであった。

この少彦名命を朝鮮半島から渡来した弥生人の一群と捉えるならば、この頃の出雲をはじめとした山陰地区は、その一群によって相当範囲で席卷されたのではないかということを上記は示唆しているのだが…。

## 序章 駒牽と東京優駿

「逢坂の関の清水に影見えて 今や引くらん望月の駒」

これは、紀貫之が詠んだ歌である。平安時代、東国から都に入る玄関口は近江と山城の国境である逢坂山であり、ここに関所が置かれていた。有名な逢坂の関である。「駒牽」に先立ち、諸国から貢進される馬を馬寮の官人が逢坂の関まで迎えにいった。これを「駒迎」という。紀貫之の歌はこの情景を詠んだものである。“満月の影が映る逢坂の関の清水に、同じく影を映すように姿をみせて、今まさに牽いてくるだろう、信濃望月からでてきた馬を”と解されている。

紀貫之は平安時代前期の貴族で歌人、「古今和歌集」の選者の一人である。散文作品としては「土佐日記」が著名である。「古今和歌集」は醍醐天皇(第60代、897年～930年)の勅命により編纂された和歌集で延喜五年(905年)に成立したとされる。「土佐日記」は紀貫之が土佐国司の任期を終えて都に帰る最中に起きた出来事を綴ったもので、日記文学としては日本最古と言われている。

「駒牽」とは、勅旨牧から奉納された馬を天皇がご覧になり、その後分配される儀式である。まずは、左衛門陣に左近・右近府と左右馬寮の関係者が集合する。そして、左衛門督が御馬解文(馬の毛並み、数などを記入したもの)を検閲して主上に奏覧する。それらの後、天皇が仁寿殿へ出御される。牧監と左右近衛府番長以下が日華門より馬を入れて、庭中を三回巡る。そして、左衛門督の命により騎乗して七～八回廻る。その後馬の分配が行われる。左衛門督臣が、左衛門府、左馬寮、右近衛寮、右馬寮に分配する。さらに、左右近衛中将、少将、左右馬寮頭助が一頭ずつ取る。

これは、或る時の甲斐国勅旨牧の駒牽の記録であるが、駒牽の様子がよく分かる。各国勅旨牧の駒牽も同様の次第にて行われていたものと思われる。現在、競馬場にはパドックと呼ばれる競走馬の下見所がある。周回コースがあり、その周りには観客席が設けられている。電光掲示板に馬番・馬名・騎手名・馬体重などが表示される。そして、競争開始前に厩務員に引かれて競走馬が周回コースを何回か周回する。観客はこれを見て馬体の状態などをじっくりと確認するのである。そして、係員の「とまれエー」の号令の後、騎手が騎乗し、又コースを一回周回する。そして、いよいよ本馬場(競争トラック)に向かうのである。この様子が駒牽の次第に似ていて面白い。但し、競馬において分配に与えられるのは馬券を投票して的中した人のみである。

「東京優駿」は日本中央競馬会(JRA)が東京競馬場(東京都府中市)で施行する中央競馬の重賞競争(G I)である。戦績優秀なサラブレッド3才馬が東京競馬場2400mでその力を競う。3才馬の冠レースとしては他に「皐月賞」(千葉県中山競馬場)と「菊花賞」(京都府京都競馬場)があり「東京優駿」を含めて3冠と言われるが、中でも注目度の高いのが「東京優駿」である。

「東京優駿」は副称で「日本ダービー」と呼ばれる。これは、昭和7年(1932年)にイギリスの「ダービーステークス」を範として東京の目黒競馬場において創設されたことによるものである。日露戦争の結果、優秀な軍馬の必要性が要請され産馬育成が奨励され、競馬も公認されていた。しかしながら、馬券の射幸性に批判的な風潮が高まり、明治41年(1908年)馬券の発売が禁止されると馬産地は大不況に見舞われる。第一次世界大戦後、陸軍が馬産奨励のため競馬に着目し、大正12年(1923年)に旧競馬法が成立し馬券の発売も合法化された。そして、馬産業者の要請を受けた東京競馬倶楽部会長の安田伊左衛門が、イギリスのエプソム競馬場で行われる「ダービーステークス」を範として「東京優駿大競争」が創設されたのである。

東京競馬場は昭和8年(1933年)目黒競馬場から移転され開場した。目黒競馬場周辺の都市化が進んだこと、競馬場が手狭になったことなどから対策されたものである。目黒からの移転に際しては100箇所を超える候補地があげられたが、土地の広さ・交通や物流の便・水の恵みと共に水はけの良さなどの条件を満たした府中が最適地として選ばれたとされる。

古来、府中市には武蔵国府が設置され大國魂神社において古式競馬が催されていた。そして、勅旨牧である「小野牧」は多摩市・日野市・稲城市界隈に比定されている。江戸時代には甲州街道の宿場町として馬市が開かれるなど栄えた。又、大正9年(1920年)から昭和15年(1940年)には近隣の八王子市や日野市に八王子競馬場が開場されていた。このように、府中市は馬との関連が深い地域であったのである。

## 第一章 「大國魂神社」

大國魂神社は、東京都府中市に鎮座する。武蔵国の総社である。近代社格制度においては官幣小社、現在は神社本庁の別表神社である。東京五社の一社であり、又、武蔵国の一之宮から六之宮までを合わせ祀るため「六所宮」とも呼ばれる。関東三大奇祭の一つといわれる「くらやみ祭」という例大祭を催行する神社としても有名である。主祭神は大國魂大神であり、大国主神と同神であるとされる。

この大國魂神社、幾つかの疑問がある。一つは武蔵国の国衙(こくが)所在地にあって、武蔵国総社とされているにも拘らず官幣小社という格付けはいかなものであろうか。又、延喜式においても、大麻止乃豆乃天神社(おおまとのずのてんじんしゃ)の論社の一つであり、扱いが卑小といわざるを得ないが何故であろうか。疑問の二つ目は祭神が明らかに出雲系であるのに、武蔵国総社に選定された不思議である。親百濟系とされる藤原氏の全盛の時代に設置された武蔵国府の総社が出雲系の祭神を祀ることに首を傾げざるをえないのである。疑問の三つ目は創建時期についてである。社伝では景行天皇の時代とされているが、経緯など明らかではない。何故にこの地にその時期に鎮座されたのであろうか。

武蔵国は東国の大国である。従って、それらの一つ一つが大和建国に関係しているのではないかと思われるのである。

### イ)「大國魂神社」の創建

大國魂神社の創建時期については、同社伝「府中六所社伝」などに記載があるという。それらに記された伝承によれば、“景行天皇41年、大國魂大神がこの地に降臨し、それを郷民が祀った社が起源とされる。その後、出雲臣の祖神「天穗日命」の後裔が武蔵国造に任じられ社の奉仕を行ってから、代々の国造が奉仕して祭務を行ったとされる。その時の社号は「大國魂神社」であった。”

上記の伝承によれば、そもそもは景行天皇の御世の時に大國魂大神がこの地に降臨したのが始まりであった。大國魂大神といえば崇神天皇が宗教改革を行い、それまで皇居内で祀られていた天照大神と倭大國魂神を外に出したことを思い出さないだろうか。倭大國魂神は大國魂大神と同神としていだろう。出雲系の神とされる大國魂大神が皇居

から外に出された。このことは何を意味するのであろうか。天皇家は初代神武天皇以降、出雲系の豪族などから皇后を迎え、次第に出雲色が強くなっていった。これを一気に日向系に復権したのが崇神天皇だった。即ちこのことは、出雲系豪族が朝廷中枢から追い出されたことを意味するのではないだろうか。そして、崇神天皇擁立に抵抗した一派は大和からも追われた。大和を追われた彼らの行く先は遠い東国の地だった。武蔵国は信濃国経由、上野国経由で出雲系の人々が進出してきていた地であった。大和を追われた彼らが逃亡先として選んだ可能性が高いものと考えられる。

しかしながら、大國魂大神が降臨したのが景行天皇41年とすれば、崇神天皇擁立から少し時間の経過がある。崇神天皇擁立に抵抗した一派が追われたとするには時間差が大きいように思われるがこのことはどのように理解すればいいのだろうか。本欄（全邪馬連投稿欄）の小稿（「崇神朝（大和）と景行朝（日向）は併存していた」）において、景行天皇九州在位説を論述した。そして、倭建命を大和王朝の天皇に据え東国征討を命じたのであった。とすれば、この時に倭建命の擁立に抵抗した勢力が東国に追われたと考えれば整合性がとれてくるのである。

さて社伝によれば、その後、天穗日命の後裔が武蔵国造に任じられたとある。天穗日命とは誰であったか。「古事記」によれば、天照大神とスサノオが誓約を交わした時、天照大神の第二子として生まれたのが天穗日命であった。アメノオシオミミの弟神である。この天穗日命、「古事記」の出雲の「国譲り」の段では葦原中国平定のため高天原から出雲のオオクニヌシのもとに遣わされる。しかし、オオクニヌシに懐柔されてその後出雲国造の祖神になったとされているのである。その後裔が武蔵国造に任じられたとはどういうことであろうか。

本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）では、出雲の「国譲り」はオオクニヌシの時代に起こったことではないことを論述した。しかも、出雲ではなく関東で起こったことを論述した。となると天穗日命は何者になるのであろうか。「出雲国造神賀詞」（新任の出雲国造が天皇に対して奏上する寿誌）によると、天穗日命は地上の悪神を鎮めるため高天原から遣わされ、地上の様子を天照大神に報告し、御子神アメノヒナドリ及び剣の神フツヌシと共に地上を平定したことが記されているという。これに関して「日本書紀」では、フツヌシと共に地上を平定したのはタケミカツチであったと言っている。これらのことを解明するには、天穗日命の出自を明らかにすることが鍵となるものと思われる。そのことによって、フツヌシやタケミカツチの正体が明かされるということになるのではないだろうか。

本欄の小稿において既に幾つかの仮説を提示してきた。一つは、イザナギは中国から渡来した徐福一行の後裔で日向（宮崎県）に拠点を築いたということである。そして「古事記」の記述では、その子に天照大神とスサノオがいた。実は、スサノオは朝鮮半島か

ら渡来した一族の後裔で出雲に拠点を築いた。九州に進出してきたスサノオは大いに乱暴狼藉を働く、そして、天照大神を現地妻として娶るのであった。このことを「古事記」では天照大神とスサノオの誓約と描くのである。その後もスサノオの乱暴は止まず、遂に天照大神は天岩屋に隠れてしまうのであった。これらの記述は出雲と日向が相克関係にあったことを示していると考えなくてはならないだろう。

ところで、イザナギが筑紫国・日向で禊を行って生まれた三貴神と言われる神には、天照大神・スサノオの他にもう一人、月読命がいた。この三神「古事記」では姉弟として描かれる。しかし、スサノオは出自が異なるためか、やがて高天原から追放されて出雲に飛ばされてしまうのであった。

そして、月読命であるが、この神は「古事記」において語られることが少ない。だから正体が不詳である。この月読命は天照大神と同じ徐福一行の後裔と考えたらどうであろうか。天照大神が太陽、月読命が月という対の関係にあることもそのことを示唆している。天照大神（太陽）が隠れて世の中が暗くなる。そこで、月読命（月）が現われてきて天照大神を救出する物語となっているのであるが、このことについては、後に詳論する予定である。

日本中に不老不死の仙薬を探しに進出した徐福一行であった。その一派が越国に土着して融合し、それが奴奈川族として発展した。そして、その首長が月読命ではなかったかと推論したものである。縄文時代から弥生時代にかけて翡翠が大いに珍重され、勾玉に加工されて全国に流通していた。そして、その産出地であると共に加工地であった越国（糸魚川市界隈）は隆盛していた地であった。このような地を徐福一行が目指したのは極自然のことと思われるのである。

所謂三種の神器と言われるものがある。天照大神を天岩屋から誘い出した鏡、スサノオが退治したヤマタの大蛇の尾からでてきた剣は概ね異論がなさそうである。そして、もう一つが八尺瓊勾玉と言われるものであるが、これこそが、奴奈川族の地・姫川（新潟県糸魚川市）から産出する翡翠の勾玉と考えていいのではなかろうか。

さて、オシオミミと天穗日命である。共にスサノオと天照大神の誓約によって天照大神の勾玉から生まれるのである。このオシオミミについて、本稿では更に仮説を拡大して月読命の子ではないかと推論するものである。オシオミミは天照大神の勾玉から生まれる。このことはオシオミミが天照大神と同系統の出自であることを示している。又、天孫降臨に際しニギノミコトは天照大神から勾玉・剣・鏡を授けられている。この勾玉が姫川の翡翠、剣がヤマタの大蛇の剣ということではなかろうか。このことについては、別章にて更に詳論することとしたい。

では次に、オシオミミの弟・天穗日命について論じてみたい。オシオミミの弟だから矢張り徐福一行の後継と考えたい。既述「国譲りは関東で繰り広げられていた」の第二章第三節 徐福一行を追いかける出雲において記述したように、紀ノ国に着地し住み始

めていた徐福一行であったが、スサノオの次男五十猛尊に追われ常陸国筑波にたどり着いた一派がいた。実はこの一派こそ天穗日命を長とするグループだったのではないかと考えるのである。そして、常陸国で徐々に勢力を築いていったのである。後には天照大神の号令に沿い、東国の征討にあたっていたのだろう。そして、御子神アメノヒナドリと共に北関東において出雲系の進出（タケミナカタ）に対峙していたのであろうものと考えられるのである。しかしながら、形勢は芳しいものではなかった。記紀では、オオクニヌシに懐柔され派遣されて3年経っても高天原に何の報告もされなかったと記述される。そこで、天照大神は北関東を獲るべく援軍を派遣した。これがフツヌシとタケミカツチであったと考えられるのである。

フツヌシとタケミカツチは記紀では、イザナギに殺された火の神カグツチから生まれたことになっている。カグツチはイザナミが生んだのだが、その時陰部に大火傷を負い、それがもとでイザナミは死んでしまうのであった。この悲しみからイザナギはカグツチの首を十拳剣ではねてしまうのであった。「日本書紀」ではこの剣から滴り落ちた血が岩群となり、それがフツヌシの祖とされている。又、「古事記」ではカグツチの血潮が周りの岩に飛び散り、そこからタケミカツチが生まれたとされている。これらのことから、岩は鉱山を示し元の神が火の神であることより、両神は製鉄系の豪族ではないかという説があるが賛成である。この頃、鉄が重要であった。製鉄系の豪族はやはり強い一族として位置づけられていたことは想像に難くないのである。そしてそのことは、タケミカツチやフツヌシは製鉄に秀でた出雲系であることが伝承されていたということではないだろうか。

上記のように、天穗日命と御子神アメノヒナドリがフツヌシとタケミカツチの力を借りて、北関東において出雲系を制圧した（「古事記」によればタケミナカタが諏訪の地に蟄居させられた）。従って、本来は鹿島神宮と香取神宮には「天穗日命」と「アメノヒナドリ」が祀られるべきところであった。しかしながら現実としては、鹿島神宮と香取神宮には「タケミカツチ神」と「フツヌシ神」が祀られている。又、記紀によれば「天穗日命」は出雲・オオクニヌシの祭主として指名されている。これらのことは、藤原氏の影響下で作られた記紀の「国譲り」神話は、史実が歪められてタケミカツチやフツヌシの出自を曖昧にし、「天穗日命」の出自も創作されて記述されたということになるのだが、詳細は順次明らかにしてゆくこととする。

そこで話を少し元に戻し、時代の流れを追って解析してみよう。

先述の推論によって天穗日命の出自が明らかにされた。それは、徐福一行の末裔で日向系であった。そして、常陸国に勢力を築いていた。記紀の記述では天穗日命は出雲においてオオクニヌシに恭順するのであるが、本稿の推論では木の国を出て常陸国に勢力を張り、出雲系の諏訪神・タケミナカタと対峙していたのだった。

その後、時代が少し経過して律令制が制定される以前の4～5世紀の武蔵地域には、

知々夫国造・无邪志国造・胸刺国造が任官されていたようである。その領域は不詳であるが、知々夫国は後の武蔵国の概ね北西部、无邪志国は東部地域、胸刺国は南部地域と考えられている。

この无邪志国の初代国造が、記紀などによれば天穗日命（出雲系の祖神）の後裔である“兄多毛比命（おたもい）”ということになっている。しかしながら、本稿の推論では天穗日命は常陸国に勢力を築いていたのであり、出雲に地盤を築くことはできない。とすると、天穗日命を出雲国造の祖とする記紀の記述は虚構であるとされなくてはならない。ということは、東国（＝関東）においては日向系による出雲系からの覇権奪還（国譲り）は完了していなかったということになる。だから、“兄多毛比命”は天穗日命の後裔ではなく出雲系の豪族とされなくてはならないのである。しかしながら、それでは日向系の面子が立たない。そこで考えられたのが、天穗日命の後裔を出雲国造にし立て、更には東国（＝関東）の国造の祖とすることだったのである。

以上の推論から導かれることは、武蔵国は相変わらず出雲系の勢力により席卷されていたということになる。

この後律令制の制定に伴い、703年に初代武蔵国司に任じられたのは引田朝臣祖父であった。この引田氏は軍事・海運系を司る阿部氏の系統と見られ、もともとは安曇海神系ではないかと考えられる。即ち、出雲系以外の国司が任じられた。出雲系の豪族が多い武蔵国に楔を打つべく派遣されたのが引田氏だったのである。当時の大和朝廷の思いの丈が理解されるような人事であった。既に幾度も論じているように、武蔵国は出雲系の強い地域であった。そこに又、出雲系の人々が大和を追われて流れてきて、現在の府中市界隈に勢力を築いた。そして、大國魂大神を祭神として大國魂神社を祀ったのである。このままでは、界隈は出雲一色となってしまう。そこで、大和朝廷の打った一石が引田氏の任命だったのである。そして、国府を構築する地として選ばれたのは、中央政権が屯倉として管理していた「多氷」界隈とされたのである。

\*「多氷屯倉」…古墳時代に設置された屯倉。律令制下の武蔵国多磨郡にあったと推測されている。

## ロ) 武蔵国の神社

延喜式神名帳によれば武蔵国の大社は二座あり、足立郡の氷川神社と児玉郡の金鑽神社である。氷川神社（埼玉県さいたま市大宮区）は、明神大社で（旧）武蔵国一之宮。祭神は須佐之男命、櫛稲田姫命、大己貴命。社伝によれば第五代孝昭天皇の御代の創建とされている。金鑽神社（かなさな、埼玉県児玉郡神川町）は、明神大社で（旧）武蔵国二之宮。祭神は天照大神、素盞鳴尊。この神社本殿を持たず背後の御室山をご神体とする。日本武尊東征の時に天照大神と素盞鳴尊を祀ったという。

武蔵国のその他の式内社は小社42座である。そして、武蔵国府の所在した多磨郡には小社が八座鎮座していた。阿伎留神社（東京都あきる野市）、小野神社（東京都多摩

市)、布多天神社(東京都調布市)、大麻止乃豆乃天神社(おおまとのずのてんじんしゃ、東京都稲城市他)、阿豆佐味天神社(あずさみてんじんしゃ、東京都瑞穂町)、穴沢天神社(東京都稲城市他)、虎狛神社(こはく、東京都調布市他)、青渭神社(あおい、東京都調布市他)である。

実は、武蔵国の総社である大國魂神社はこれらの中のうち、大麻止乃豆乃天神社の論社(ろんしゃ:似たような神社のどれが延喜式内社か決め難い神社)の一つである。他に、先述の稲城市の神社、武蔵御嶽神社(東京都青梅市)、天満社(東京都八王子市)、天神社((東京都府中市)の四社あり、都合五社の内の一社が真の式内社であるとされている。本章は、大國魂神社を論じているので、この決着をつけないで先に進む訳にはいかないだろう。

古い神社を検討するにあたっては、神社の創始神、天武天皇の宗教改革の洗礼、延喜式の扱いという時代の流れの中で考えないといけないだろう。

武蔵国の延喜式内社八社のうち、布多天神社・阿豆佐味天神社・穴沢天神社は祭神が少彦名命である。そして、大麻止乃豆乃天神社の論社である稲城市の大麻止乃豆乃天神社と青梅市の武蔵御嶽神社は祭神が櫛真知命であり、府中市の天神社は祭神が少彦名命である。これらの祭神が延喜式以降変えられていないとすれば、それは天武天皇の宗教改革の時に設定された可能性が考えられる。まずは少彦名命であるが、この神様は「古事記」ではオオクニヌシと共に葦原中つ国を経営し繁栄させた神様である。その後、オオクニヌシは「国譲り」をして天照大神に恭順するので、伊勢神宮(天照大神)を国家神道の頂点とする体系にそぐわないことはない。とすれば、天武天皇の宗教改革によって祭神が変更されたかもしれないのである。紀元前に武蔵国に入植してきたのは出雲系の人々であった。とするならば、祭神はスサノオしかいないのではなかろうか。しかしながら、出雲をストレートに代表するスサノオである。しかも、天照大神と敵対した暴れ神である。これを祭神として容認するわけにはいかなかった。結果、国造りに貢献されたというところで少彦名命が選択された可能性は考えられなくはない。

しかしながら、武蔵国に上記のように多くの少彦名命が祀られることには何か所以がありそうである。しかも、オオクニヌシの時代は紀元後であり、スサノオの時代よりずっと後代のことと考えられる。

「古事記」に少彦名命の記述がある。オオクニヌシが国造りに悩んで海を眺めていると、小さい船が岬に漕ぎよってきた。乗っていたのが少彦名命であり、高天原の神産巢日神の子という。そして、オオクニヌシは少彦名命を相棒として国造りに励むのだった。ところが、ある日のこと、少彦名命は突然自分の役目はここまでだと言い、海の彼方の常世国に帰ってしまったのである。

少彦名命は神産巢日神の子というから、朝鮮半島からの渡来の一派と考えていいだろう



う。そして、オオクニヌシに協力して出雲の国造りに励んでいた。ところが、そこで何らかの政変が起こった。そして、少彦名命は常世国、即ち武蔵国に追われてしまうのである。そして、武蔵国の地の開拓に励んだ。阿豆佐味天神社（東京都瑞穂町）、布多天神社（東京都調布市）、穴沢天人社（東京都稲城市）、天神社（東京都府中市）は、少彦名命が開拓し、繁栄させた地であった。だから、祭神として永く祀られてきたのではないかと考えられるのである。

では、大麻止乃豆乃天神社についてはどうであろうか。先ず武蔵御嶽神社であるが、明治時代になり神仏分離によってそれまでの御嶽大権現から大麻止乃豆乃天神社に改称したという。崇神7年の創建、736年に行基が蔵王権現を勧請したと言われているが、祭神の櫛真知命（くしまちのみこと）との関連が今ひとつ不明瞭である。次に稲城市の大麻止乃豆乃天神社であるが、江戸時代までは丸山明神と称していたという。稲城市大丸地区に鎮座するが、大丸の地名は当地の地勢“大きな丸い平地”からきているという。相応の古社と思われるが祭神（櫛真知命）が何時祀られたのかなど由緒がはっきりしない。

両社に共通するのは祭神が櫛真智命（くしまちのみこと）であり、天香山神社（奈良県橿原市、祭神が櫛真智命）との連関が窺われる。櫛真知命の元の名は大麻等乃知神（おおまとのちのかみ）とも言われので、両社のいずれかが大麻止乃豆乃天神社である可能性も否定はできないが、出雲系と考えられる大國魂神社の創建との関連性について、確かなものが伝承されていないようである。

以上の検討から本稿では、府中市の天神社（東京都府中市宮町）が少彦名命を祭神としていることから、大麻止乃豆乃天神社の比定社と考えたい。古来この地にスサノオを祀る一派が入植してきていた。そこに、出雲を追われた少彦名命の一派が高い技術を帯同して移動してきて、界隈を繁栄させたのである。そのようなことから、武蔵国府は由緒ある「大麻止乃豆乃天神社」に隣接する地に設置されたものと考えられるのである。

尚、八王子市の天満社は祭神が菅原道真であり、時代が整合しないものと思われる。

## 第二章 「天孫降臨」の真実

本稿では、出雲の「国譲り」の真実を解明しようと考えている。そこで先ずは、主役であるオオクニヌシ神話について、記紀の記述するところの概要を復習しておきたい。

オオクニヌシはスサノオの6代孫のオオナムジとして登場する。そして、八十神と呼ばれる兄弟と共に稲羽のヤガミ姫の求婚に向かう。途中、白兔を助けたオオナムジはヤガミ姫の心を掴む。これに嫉妬した八十神に命を狙われたオオナムジは根の堅州国に逃げ、スサノオの娘スセリヒメと結ばれる。根の堅州国ではスサノオの数々の試練を切り

抜けて、スサノオからオオクニヌシの名を与えられる。そして、オオクニヌシは八十神を打ち倒し国造りを始めるのである。

「国譲り」についての「古事記」の記述では、オオクニヌシとスクナビコナの協力で出雲国は繁栄した。更に、オオモノヌシを大和の三輪山に祀ったことで、それまで葦が生えていただけの地上は出雲国を中心に豊かな水穂の実る国土となり、よく治まり繁栄していった。これを高天原からみていた天照大神は、「そもそも地上は父母のイザナギ・イザナミの作ったもの。国つ神より天つ神による統治が望ましい」と考え、天孫による地上界の統治作戦が展開され、オオクニヌシは「国譲り」を承諾するのである。

「国譲り」によって高天原による地上界の支配が確定すると、今度は統治者を派遣することとなる。天照大神が最初に指名したのは子のオシオミミであったが、オシオミミはその子のニニギの任命を提案する。そしてこれが受け入れられ、ニニギが地上界の統治者として降臨するのである。これが所謂「天孫降臨」と言われるのである。

しかしながら、これらの記述には幾つかの疑問がある。その中でも最大の疑問は、時代の不整合だろう。スサノオの6代孫のオオナムジがスサノオの娘のスセリヒメと結婚できるはずがない。従って、スセリヒメを娶ったオオナムジと6代孫のオオクニヌシは別人格としなくてはならない。又、天照大神とスサノオは姉弟である。この天照大神がオオクニヌシから「国譲り」を求めるのも時代が整合しない。更には「天孫降臨」についても、天照大神の孫のニニギが「国譲り」が成った後の地上界に降臨するというのも、時代が逆転しているのである。

この時代の不整合を解くには、記紀の紙背に隠されている暗号を読み解かねばならないだろう。そこで、時代を少し戻してイザナギ・イザナミの国生み神話について検討してみたい。イザナミはイザナギの妹であるが、やがて夫婦の契りを交わし「国生み」し、そして、国々を支配する神々を生む。その後、イザナミは火の神カグツチを生んだ時の火傷が元で亡くなってしまふ。イザナミを慕うイザナギは黄泉の国を訪ねるが恐ろしいイザナミの姿を見たイザナギはそこから逃げ出してしまふ。追いかけるイザナミは「一日に地上の人間を千人殺す」と言う。これに対しイザナギは「それなら一日に千五百人子を生ませよう」と応答する。これらの記述は、イザナミとイザナギの勢力が及んでいた範囲と勢力争いの様子を著しているのだろう。

黄泉の国から地上に戻ったイザナギは、日向の阿波岐原で禊を行う。そこで何柱かの神と海神を生んだ後生まれるのが、天照大神・スサノオ・月読命の三貴神である。この天照大神とスサノオも姉弟として著される。ところが、スサノオが根の堅州国に行きたいと泣き叫び乱暴を働くのでイザナギに葦原中国からの追放を言い渡される。そこで天照大神に別れの挨拶に行ったスサノオは、天照大神と「誓約」を交わすこととなる。こうして、スサノオの剣から三柱の女神が生まれ、天照大神の勾玉から五柱の男神が生ま

れるのである。そして、スサノオは「私の心が清いから女神が生まれた」と勝ち誇るのであった。その後もスサノオの乱暴は続き、遂に天照大神は天の岩屋に隠れてしまう。

このような記述から、イザナミとスサノオは黄泉の国（＝出雲）の勢力であることが明かされる。又、イザナギと天照大神は高天原（＝日向）の勢力であることが明かされる。即ち、出雲と日向は相克関係にあったことを示しているのである。であるならば、スサノオと天照大神の「誓約」とは結婚などではない。両者の勢力版図のことを言っているのである。スサノオの生んだ三柱の女神は宗像海神族の支配を示しているのだろう。又、天照大神の生んだ五柱の男神は各地に配された勢力を示しているものと考えられる。

では、天の岩屋隠れとは何を意味するのであろうか。これこそ、スサノオによる天照大神の幽閉ということになる。出雲を連合したスサノオは北九州に進出し宗像海神族を連合する。更には余勢を駆って日向イザナギに連合を呼びかける。しかしながら、イザナギは葦原中国からの追放を言い渡す。即ち、連合を断り両陣営は戦争になる。そして、戦いに勝利したスサノオは天照大神を幽閉するのである。このことを記紀は天の岩屋隠れと記述するのである。因みに「先代旧事本紀」はこのことを、“天照大神がスサノオに三柱の女神を授けて筑紫の宇佐嶋に降らせられた”と言っている。

次にオオナムジとスセリヒメの記述である。オオナムジはスサノオの子として登場する。従って、スセリヒメとは姉弟か妹兄の関係である。それにも拘らず二人は結婚する。この関係式は既述のイザナミ・イザナギの関係、スサノオと天照大神の関係と同様に二つの勢力の相克を著しているものと推論される。

天照大神（イザナギの娘・向津姫）は、スサノオの九州侵攻により日向から宇佐に連行されスサノオに娶られてしまった。これを救出したのがオオナムジであり、オオナムジは月読神（徐福系で越国奴奈川族の長）の子であるオシオミミの子であったと推論してみたい。越国から出て、スサノオの子の八十神と戦い戦いしながら、スサノオ出雲を攻略するのである。そして、スサノオの娘スセリヒメを娶り、宇佐で幽閉されていた天照大神の救出に赴くのである。記紀の記述において天孫降臨はオシオミミの子のニニギが地上界の統治者として派遣され、日向高千穂に降臨するのであるが、それはオオナムジの九州侵攻と天照大神の救出劇だったのである。このスサノオによる天照大神の宇佐への連行と幽閉を“天岩屋隠れ”、オオナムジによる救出劇を“天岩戸を開く”と記紀は記述するのである。そして、救出された天照大神（＝向津姫）は天孫による地上界の統治作戦を展開することになる。即ち、出雲からの覇権奪回作戦である。

「古事記」によれば、協力して天岩戸を開いた神々の大半はニニギの「天孫降臨」に随伴している。このことの意味するのは、“天岩戸を開いた”ことと「天孫降臨」とは連動して展開されたことを示しているのだろう。そして、それを担った神こそオオナムジ（＝ニニギ）だったのである。

天津神社が新潟県糸魚川市に鎮座する。式内社論社で越後国一宮を称する。祭神がニギミコト、天児屋根命、太玉命の三柱である。天津神社は各地に鎮座しているが各々祭神が異なっているので、どこからか勧請されたものではなさそうである。とすれば、この地が「天孫降臨」と何か関わっていたのではないかということが想像される。そして、境内社に奴奈川神社が鎮座し、主祭神が奴奈川姫である。このことから、「天孫降臨」には奴奈川族も関わっていたことが連想される。

又、糸魚川市には能生白山神社が鎮座し、祭神として奴奈川姫、イザナギ、オオナムジを祀る。一般的には、「古事記」に記述されるオオクニヌシと奴奈川姫との求婚談が祭神のベースとされるのであるが、果たしてどうであろうか。この神社の一面に“蛇の口の水”という湧水があり、これは戸隠山からの湧水とされている。戸隠山に鎮座する戸隠神社の九頭龍社が龍の頭、そしてその尾から湧いて出ているとされているのである。古来、戸隠山は奴奈川族が神と仰ぐ霊峰だったのであり、能生白山神社の創建はオオクニヌシの時代を遡らなければならないだろう。

そして、戸隠神社（長野県長野市）には天岩戸を開いた神に関するユニークな伝説が伝わる。戸隠神社の奥社は九頭龍社と並んで鎮座する。祭神は天手力雄命であるが、この神、「古事記」では天照大神が天岩屋に隠れた時、神力をもって天岩戸を開き天照大神を天岩屋から導き出したと記述される。そして、この天岩戸を放り投げて地上に落ちた所が戸隠山になったという話が連面と伝わっているのである。

糸魚川市界隈は縄文時代から弥生時代にかけて翡翠の産地として栄えた地域だった。そして、産出された翡翠は全国に流通する程だった。従って、この地に鎮座する神社や祀られる神々は古代日本建国に大いに関わっていた可能性が高いのではないだろうか。しかしながら、記紀はこの地のことを余り語らない。それは、この地や神々のことを語ることは記紀の描く建国物語を根本から揺るがしてしまうからなのではないだろうか。

### 第三章 第一次「国譲り」の真実

第二章の推論により、「天孫降臨」は天照大神の時代のことと考えられる。そして、「天孫降臨」によって救出された天照大神は、地上界の統治作戦を展開することとなる。この地上界の統治作戦こそ記紀に描かれる「国譲り」というものではないだろうか。しかしながら、その時代はオオクニヌシの時代ではなかった。オオクニヌシの時代はそれよりずっと後のことであるものと考えられるからである。とすれば、「国譲り」は二つの時代に起こったことを括って記紀が記述しているものと考えられるのである。そこで、本稿では記紀の描く「国譲り」を第一次「国譲り」と第二次「国譲り」に分けて検討してみたいと考えているところである。

話を進めよう。「国譲り」にあたり、最初に地上界の統治を命じられたのはアメノオ

シオミミであった。ところが、天の浮橋から地上の神々の騒々しさをみたオシオミミは、「国つ神が反対して騒いでいる」と思い、統治を諦めて戻ってしまうのであった。このオシオミミが天の浮橋からみた地上の神々とはどこの神々のことだったのだろうか。天の浮橋は、かつてイザナギ・イザナミが国生みを命じられて降り立ったところでもある。これらの記述だけでは天の浮橋の場所を比定することは困難であるが、タケミカヅチが葦原中つ国を平定し帰順させた後、天照大神が平定した出雲国の統治司令官にオシオミミを任命することから、それは出雲国界限と考えられる。天照大神による地上統治作戦の第一弾はオシオミミによる出雲国の平定だったことが推論されるのである。しかしながら、天つ神が地上界を統治しようと降りてくると知った国つ神が防戦体制を敷いたらしく、作戦は失敗に終わるのであった。これらの記述の意味するのは、出雲族の勢力範囲がもはや出雲国にとどまらず、日本各地に及んでいたということを行っているのではないだろうか。そして、「葦原中つ国には暴威を振るう乱暴な国つ神が大勢いるようだ。どの神をどこに派遣して平定したらよいだろうか」と天照大神と八百万神が合議することとなる。

「古事記」の描く地上統治作戦の第二弾はアメノホヒの派遣であった。しかしながら、地上界を統治していた国つ神オオクニヌシは天下ってきたアメノホヒを大いに歓迎した。そして、懐柔されて安楽な生活に浸ったアメノホヒは3年経っても高天原に何の報告もしなかったのである。

アメノホヒの派遣については本稿第一章で詳論した。アメノホヒはスサノオと天照大神との誓約によって生まれた天照大神の第二子である。従って、オオクニヌシとは活躍時代が異なる。この頃、東国（＝関東）では日本海経由で進出してきたタケミナカタ出雲族と天照大神の日向系が勢力を張った常陸国とが覇権を争って対峙していた。その日向系の頭領こそがアメノホヒであったと考えるのである。“オオクニヌシに懐柔されて3年経っても高天原に何の報告もされなかった”と記述されるのは、両者相譲らず膠着状態になっていたことを示しているものと考えられるのである。

埼玉県久喜市に鷲宮神社が鎮座する。祭神は天穗日命と武夷鳥命、そしてオオナムジである。社伝によれば、出雲族の草創に係わる関東最古の大社とされ、神代の昔天穗日命と武夷鳥命が東国を経営するため部隊を引き連れて武藏国に到着し、地元の豪族と共に当地の鎮守としてオオナムジを祀ったのが始まりとされている。この社伝は、国譲りの後出雲国造の祖神になったと「古事記」に記述される天穗日命の出自が元になっているものと考えられる。しかしながら、出雲国造の祖神となった天穗日命が部隊を引き連れて東国（＝関東）に定着したという社伝はどうにも理屈に合わない。スサノオと天照大神との誓約によって天照大神の第二子として生まれた天穗日命であるならば、それはやはり日向系としなくてはならない。従って上記の社伝は、天照大神によって東国経営のために派遣されたのが天穗日命親子であったと読み替えなければならないだろう。そ

して、鷲宮神社に天穗日命が祭神として祀られることは、かつてこの地において天穗日命親子が大いに活躍していたことの証と考えられるのではないだろうか。

アメノホヒの次に派遣されたのはアメノワカヒコであった。アメノワカヒコは天津国玉神の子で天つ神である。しかしながら、アメノワカヒコはオオクニヌシの娘（下照姫）の色香に心を奪われ欲望の虜になってしまう。そして、葦原中つ国を我が物にしようと企み、8年経っても高天原に何の報告もしなかったのである。天上界からはナキメを伝令として派遣するもうまくいかない。結局、アメノワカヒコは天上界から放たれた矢に当たって死んでしまう。この死によって地上界と天上界の関係が悪化してしまうのである。

この部分の「古事記」の記述は、時代と登場人物が錯綜しており、大いなる整理と推論が必要である。まずはアメノワカヒコ。天津国玉神の子とされるが、天津国玉神は金山毘古神の子で、金山毘古神はイザナミが火之迦具土神を生んでできた火傷で苦しんでいる時嘔吐物から生まれた神である。即ち、イザナミのひ孫であり出雲系ということになる。出雲系の神が出雲の「国譲り」に指名されるということはどうにも理屈に合わないのである。アメノワカヒコは、天照大神から天之麻迦古弓と天之波波矢を授けられて「国譲り」の使者に指名されるのであるから、これはやはり日向系の神としなくてはならないのである。

では、アメノワカヒコとは何者であろうか。本稿では、オオナムジこそアメノワカヒコのことではないかと考えてみた。天津国玉神をオシオミミに置き換えて考えてみた。そして、出雲で娶った下照姫とはスサノオの娘のスセリヒメのことであろう。天上界から放たれた矢に当たって死んでしまうのはアメノワカヒコでなくスサノオであったろう。スサノオの死について「古事記」は殆んど語らないが、アメノワカヒコの喪屋を出雲に築くとあり、アメノワカヒコ⇒スサノオを示唆しているのではないだろうか。その代わりに、アメノワカヒコにそっくりなアジスキタカヒコネ（⇒オオナムジに入れ替わり）が喪屋を蹴飛ばすと美濃に飛んでゆくのである。何とも不思議な記述であるが、これは、アジスタカヒコネ（=オオナムジ）によって征討されたスサノオ陣営の残党の逃亡先が美濃の地であったというふうに理解したらどうであろうか。

以上のように、アメノワカヒコの記紀の記述は、オオナムジが越国を出てスサノオ出雲を席卷する物語の謂わば“焼き直し版”ではないかと考えるのである。そのように考えることで、この不思議なアメノワカヒコ物語が理解されるのではないだろうか。

さて、“記紀の描く”高天原の地上統治作戦は、西国においても東国（関東）においても膠着状態となっていた。そこで考えられたのが強力タケミカツチの派遣による大軍事作戦である。事代主神はあっさりと降伏してしまうが、タケミナカタは力比べを申し出る。しかしながら、こちらも敗走し信濃国に追い詰められ諏訪の地を出ないことと、

国を差し出すことを約すのである。そして両者の降伏と敗北を受けて、オオクニヌシは国を譲ることを承諾するのである。

タケミカヅチが（出雲の）稲佐浜に降り立った時、事代主神は出雲に居なかった。そこで、アメノトリフネに探し出されて出雲に連れ戻されて降伏するのである。では、事代主神はどこにいたのであろうか。先述のように出雲は既にオオナムジによって席卷されていたのであるから、事代主神の降伏は出雲のことではない。「日本書紀」では、事代主神はミシマミゾクイ神の娘（タマクシヒメ）と結ばれてヒメタタライズヒメ（神武天皇の皇后）が生まれたと記される。溝咋神社が大阪府茨木市に鎮座し、祭神はタマクシヒメとヒメタタライズヒメである。とするならば、事代主神は摂津国界隈に勢力を張っていた。そして、タケミカヅチに攻められて降伏したと考えられるのである。

又、タケミナカタの降伏については各段において詳論記述したところであるが、「古事記」の言うようにタケミナカタがオオクニヌシと高志国沼河姫との子とすると時代が合わないし、「先代旧事本紀」の言うようにオオナムジとの子とするとタケミナカタは出雲系とはならない。とすれば、タケミナカタはやはりスサノオの子と考えざるを得ない。ミナカタとはムナカタ、即ち、宗像海神族の流れを汲むとの一説がある。このことはスサノオの九州進行時に宗像海神族の姫との間に儲けられたことを示唆しているものと考えられる。そして、大歳尊と同様にスサノオの全国制覇の野望を担って、宗像海神族の軍事力を背景に信濃国に進出し、東国（＝関東）を窺っていた。従って、タケミナカタがタケミカヅチに降伏したというようなことは史実ではなく、大歳尊の東国平定に連動して東国（＝関東）を窺っていたものと考えられるのである。

しかしながら、以上のことだけでは国譲りが完了したことにはならない。オオモノヌシを大和の三輪山に祀ったことで栄えたとされる大和国が残されているからである。そこで記紀では、カムヤマトイワレヒコの東征によって大和をとり初代神武天皇の誕生を記述するのであるが、これは史実とはし難いだろう。イワレヒコの東征軍は浪速を過ぎた時、登美（奈良市）の豪族ナガスネヒコに攻められて行く手を阻まれてしまう。そこで、一行は紀の国（熊野）で体制を整えて大和を目指すことになる。この時高天原の天照大神とカムムスビは、地上界で苦戦しているイワレヒコを助けるようタケミカヅチに命じる。すると、タケミカヅチは自分が国を平らげた時の太刀を差し出すのである。そして、一行は悪しき神を祓い大和を目指すことになる。

記紀の描くイワレヒコの東征は第一次国譲りの締めくくりであろうと推論する。だから、ここでもタケミカヅチが登場し武力援助をして大和をとりに行くのである。では、史実において大和をとるよう命じられたのは誰であったのだろうか。この頃、大和には出雲族の一派が鉄を求めて入植していた。そして、彼らを足がかりにして大歳尊が東征し、ニギハヤヒと名乗り「大和国」を建国していた。そこで高天原（天照大神）は、紀の国（熊野）の豪族・熊野楠日尊（アメノホヒの弟）の子（狭野命）をニギハヤヒの娘

(イスケヨリヒメ)に入り婿させるべく画策するのである。狭野命は大和に入り橿原に宮殿を造り天下を治めることになる。神武天皇の誕生である。

上記の大歳尊の東征と「大和国」建国については、本欄の小稿「二つの天孫降臨は連動していた」において詳論した。「先代旧事本紀」によれば、ニギハヤヒは十種の神宝を持ち三十二神の供を従えて天磐船に乗り高天原から河内国に降り立つ。その後再び大空を翔け大和に移る。そして、大和の支配者ナガスネヒコの妹を妻とし、一族の長として当地を治めていた。後にイワレヒコがやってくると、服従を示さないナガスネヒコを殺害し、自らの支配地をイワレヒコに差し出すのだった。

このニギハヤヒは史実ではスサノオの子の大歳尊と考えられる。山下重良氏の「古代日本原記」によれば、“大歳尊(=ニギハヤヒ)はスサノオの九州統一に活躍した後、北九州を出発し瀬戸内海を制覇しつつ畿内を目指し、遂には大和に入り「大和国」を建国する。更には、東海・東国にも進出し覇権を樹立した。やがて、大歳尊が亡くなると末子の御歳姫(イスケヨリヒメ)の成人を待って、日向から狭野命を養子に迎える。そして、イワレヒコと名乗り橿原宮で王位を継承して初代神武天皇となる”と著されているのである。

「古事記」では「国譲り」はタケミカヅチによる軍事作戦によって終息する。但し、「日本書紀」では主役はフツヌシとなっている。いずれにしても、画期的な国譲りで大活躍した二神であるが、不思議なことに記紀ではその正体が明かされないのである。そこで本章の締めくくりとして、以下にてタケミカヅチとフツヌシが誰かについて明らかにしたいと思う。タケミカヅチもフツヌシも記紀の記述では、第一章で記述したようにイザナギが切った迦具土神が起源であり同神とみてよさそうである。では、タケミカヅチ=フツヌシとした時それは史実では誰のことになるのであろうか。

先述のように、タケミカヅチは攝津国で事代主命を降伏させている。このことは、大歳尊(=ニギハヤヒ)の東征途上において瀬戸内の豪族を平らげてゆく過程として著わされているのであろう。又、タケミカヅチがタケミナカタを降伏させる物語は、大歳尊(=ニギハヤヒ)が「大和国」建国後に東国(=関東)を平らげた物語ということであろう。そして、最後が大歳尊(=ニギハヤヒ)の娘イスケヨリヒメに日向系の狭野命を迎え、「大和国」の王位を継承させ、初代神武天皇が誕生するということなのではなかろうか。

結論は、タケミカヅチ(=フツヌシ)=大歳尊(=ニギハヤヒ)ということになるのである。

## 終章 第二次「国譲り」の真実

第三章の記述により「国譲り」の一幕は完結した。しかしながら、「国譲り」の全幕が完結したとはし難いのではないだろうか。何故なら、オオクニヌシと少彦名命の国造



り物語とオオモノヌシを大和に祀って国が繁栄した物語が殆んど語られていないからである。本章ではこれらの物語を追求し本稿の“まとめ”といたしたい。

「古事記」の記述では、少彦名命はオオクニヌシの国土造成に際し、天乃羅摩船に乗って波間より来訪し、神産巢日神の命により義兄弟の関係となり国造りに参加する。尚、「古事記」では神産巢日神の子と記されるが、どういう訳か「日本書紀」では高皇産靈神の子と記される。これは少彦名命の出自を曖昧にする意図と思われるが、いずれにしても、船に乗ってやって来たのであるから、それは渡来系の人々を著しているものと考えられる。

本欄の小稿「相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった」において記述したところであるが、この頃（紀元前後から紀元3世紀頃）高麗から出雲に積石塚が伝わり四隅突出型墳丘墓として発展したのではないかと推論した。BC37年、夫余族の朱蒙が東夫余の金蛙王のもとから逃れて南下し、高句麗を興した。BC37年というのは神話的な歴年であり、歴史的な歴年ではないとされるが、その頃、夫余族の朝鮮半島北部への南下進攻が盛んであった。この難を逃れた人々が出雲にやって来たのではないだろうか。そして、帯同してきた優秀な技術力や葬送儀礼を出雲にもたらし、発展させたものと推論されるのである。

しかしながら、少彦名命は葦原中国の繁栄半ばで、突然常世国に行ってしまうのであった。このことは何を意味するのであろうか。義兄弟のオオクニヌシが追い出したのではなさそうである。とすれば、それは何かの外圧がかかったか何かの政変があったのかという事が想像される。

そこで想起されるのは、宇摩志麻遲命（ウマシマジ）である。ニギハヤヒがナガスネヒコの妹（三炊屋姫・ミカシキヤヒメ）を娶って生んだ子で、イスケヨリヒメが成人するまで「大和国」の摂政を務めたとされる。物部神社（島根県大田市）は石見国の一之宮で祭神がウマシマジである。社伝によれば、ウマシマジは美濃国・越国を平定した後石見国で没し、現在の社殿の裏に埋葬されたという。

このウマシマジの任命が謎である。神武天皇の皇后（イスケヨリヒメ）の義兄が不遇な左遷人事を食らうとは思われない。とすれば、それは第一次「国譲り」後の大和政権による戦略人事だったものと考えられるのである。第一次「国譲り」後の出雲はアジスキタカヒコネの後裔が治めていたと考えたらどうであろうか。別名の迦毛大御神というのが製鉄系の神であることを示唆している。又、“大御神”という命名は、天照大御神と二神のみであり、この頃の代表的な神と考えられる。即ち、オオクニヌシのことを言っているのではないだろうか。

アジスキタカヒコネ（⇒ここではオオクニヌシに入れ替わり）を中心にして、第一次「国譲り」後の出雲は製鉄技術を武器にして復活してきていたのである。そこで、大和

政権の採った政策がウマシマジ（の後裔）を派遣して出雲の鉄を押さえることだったのである。そして、このウマシマジ（の後裔）の派遣によって、アジスキタカヒコネ（＝オオクニヌシ）を助けていた少彦名命は出雲を追われることとなり、逃げた先が武蔵国だったのである。

では、このウマシマジ（の後裔）の派遣戦略は成功したのだろうか。結論を言えば、それは成功しなかった。何故なら、「古事記」の記述するように海原から新しい神（大物主神・オオモノヌシ）が現われて、御魂を大和の三輪山に祀れと言うのである。そうすると、地上界は出雲を中心として水穂の実る国土となり、良く治まり、繁栄して行くのである。

まずはこのオオモノヌシの正体を明らかにする必要がある。Webサイトに「人文研究見聞録」という論文が公開されている。詳細は論文を参照願いたいだが、これによると、オオモノヌシ＝ニギハヤヒ＝大歳尊ということであるが、賛成である。とすれば、次に問題になるのは“御魂を大和の三輪山に祀れ”と言ったことの意味である。大歳尊は既にずっと以前に「大和国」を建国していた。そして、そこに日向系のイワレヒコが婿入りして大王となり、初代神武天皇となっていた。とすれば、“御魂を大和の三輪山に祀れ”の意味は大歳尊の「大和国」建国を意味するのかも知れない。

しかしながら、そうだとするとどうにも時代の整合性がとれない。オオクニヌシの時代はスサノオの時代より概ね200年位後のことと考えないと整合性がとれないのである。従って、“御魂を大和の三輪山に祀れ”の意味は、再びの出雲による大和の制覇ということになる。第一次「国譲り」によって日向系の神武天皇が立ち上がったが、以降次第に大和王朝は出雲色が濃くなっていく。“御魂を大和の三輪山に祀れ”とは、このことを意味するのではないだろうか。大歳尊によって築かれた「大和国」が一時日向によって奪われた。しかしながら、オオクニヌシによって再び出雲に奪還されていったのである。

こうして第二次「国譲り」の舞台が整った。では、第二次「国譲り」はどのように展開していくのであろうか。本稿では崇神天皇の誕生物語こそ第二次「国譲り」と考えている。

記紀においては崇神天皇の誕生物語は殆ど語られることがない。記紀の語る崇神天皇の話は、出雲の崇りで疫病が流行したので、その対策としてオオモノヌシを大和の三輪山に祀ることから始まる。そして、その結果疫病が収まり国に平和が戻るのである。この出雲の崇りが何故発生したのかということについて記紀は語らないのである。普通に考えれば、崇られるような酷い（ひどい）ことをしたからということになる。どのようなことだったのであろうか。

記紀は第二代綏靖天皇以降第九代開化天皇までの事績を語らない。そこで、欠史八代

と称されるのであるが、「古事記」第七代孝靈天皇の条に“大吉備津日子命と若建吉備津日子命が吉備国を平定した”という事績が語られている。殆ど語られることのない欠史八代の中で語られるこの記事はたいへん重要である。この頃吉備国は出雲国と友好関係にあった。従って、吉備国を平定することは出雲国に侵攻することと同義と理解できるのではないだろうか。実際に出雲国に侵攻した記事はないのであるが、オオクニヌシによって奪還された大和の再奪還作戦の始まりと理解されるのである。

もう一つ。「日本書紀」崇神天皇紀に出雲神宝収奪事件とも言われる記事がある。崇神天皇は群臣に詔して、“武日照命が天から持ってきた神宝が出雲大神の宮に所蔵されている。これが欲しい。”と言い出したとある。神宝の管理者である出雲フルネが不在だったので、弟のイヒイリネは天皇の命に従い神宝を献上する。戻ったフルネは弟を責め、殺してしまう。これを聞いた朝廷側は武人を派遣してフルネを誅殺してしまうのである。

出雲大神の宮に所蔵されている神宝とは何のことであろうか。この神宝こそ出雲の肝ともいふべき、製鉄技術そのものであったろう。大和朝廷側はこの出雲の肝を奪い、あろうことか王族一党を抹殺してしまったのである。この事件、「日本書紀」では神宝の管理者の誅殺と記されるのであるが、そのようなことではなかったろう。矢張り、出雲の肝を奪ったのであるから、王党一族の抹殺と考えたい。即ち、オオクニヌシが抹殺されたということになる。何とも恐ろしい事件であった。この事件、崇神天皇60年のことと記されるがそういうことではないだろう。出雲の崇りに対しオオモノヌシを祀って鎮めた後、再びそのようなおぞましい事を行うことは考えられない。従って、この事件は崇神天皇が擁立される過程で起こった事件としか考えられない。だから、崇神天皇の時世に出雲の崇り（疫病流行）が発生する事態となるのである。

最後に、「魏志倭人伝」の記述との関係に言及しなくてはならない。上記のように、製鉄技術を軸にして再復活してきた出雲は、余勢をかって北九州に大和にと進出する。そして、それに対応せんとして、邪馬台国（日向と考えている）・卑弥呼の連合した北九州各国との間で倭国大乱が発生するのである。又、大和地区においては、オオクニヌシに押されて退潮気配となった日向系を立て直すべく、卑弥呼が崇神天皇の擁立に動いていったものと考えられるのである。

この製鉄技術を軸にして再復活してきたオオクニヌシ・出雲こそ、「魏志倭人伝」の言う拘奴国ということになる。この拘奴国（オオクニヌシ・出雲）と邪馬台国（卑弥呼・日向）の覇権争いについては本稿では言及しないが、本欄の小稿「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」及び「崇神朝（大和）と景行朝（日向）は併存していた」に詳述したのでご参照願いたい。